

# 会報

No.61

2026年3月  
川崎市立小学校長会  
小学校教育研究会  
小学校学校経営研究会

# 目 次

『川崎市制101年目、大きな潮流のなか、足元と未来を見据える川崎の小学校教育をめざして』	
会 長 小林 勝弘	4

『子供を主役にした学びの推進』	
川崎市教育委員会 教育長 落合 隆	5

## 川崎市立小学校長会

活動方針・重点課題	6
役員・組織分担表・小学校一覧表	8
小学校教育の充実発展に関する意見交換会の経過	10
小学校長会の歩み	12
支部だより	14
専門研究会議・教育課題研究会議・特別委員会活動報告	31
研究・研修参加報告	43
記念行事	46
退会会員のことば	55
新会員のことば	63
元会員のことば	66
小学校長会規約	68

## 川崎市小学校教育研究会

役員・組織分担表（神奈川県小学校教育研究会川崎市役員名簿）	74
川崎市小学校教育研究会活動方針	76

## 川崎市立小学校学校経営研究会

学校経営上の諸問題	81
学校経営研究報告	82
研究会規程	103

編集後記	104
------	-----



## 『川崎市制101年目、大きな潮流のなか、足元と未来を見据える川崎の小学校教育をめざして』

川崎市立小学校長会 会長 小林 勝弘

川崎市制 100 周年をお祝いし、地域の素晴らしさや歴史の重さを改めて認識した令和 6 年度。そして、迎えた 101 年目。心機一転、新たな一歩を踏み出した令和 7 年度。幸区に新小倉小学校が開校となり、市立小学校は 115 校となりました。各校、教員不足という状況下ではありますが、教育課程を工夫したり、教員の働き方・仕事の進め方改革を積極的にすすめたりするなど、創意工夫を重ねて、学校経営を行ってまいりました。

さて、校長会は、今年度も研究主題を「夢や希望をいだき、個の自立と、共に生きる力を育む学校経営」とし、その実現に向けて 4 つの活動の重点と 14 の具体的な取組をあげ、各研究会議・特別委員会・支部校長会議等を通じて活動を進めています。現在、学校を取り巻く環境は厳しさを増しています。特に、教員の欠員・未充足については、危機的状況となっており、なかなか改善の兆しが見られない現状があります。その他にも、経験の浅い教員が増える中での人材育成、いじめ・不登校・別室対策等の児童指導や保護者対応、働き方・仕事の進め方改革の推進等々学校が取り組まなければならない課題が山積しています。この 4 月、全市校長会議の中で、主に次のことを大切にしていこうと話しました。

- ①情報提供・情報共有に努める
- ②パワハラ、セクハラ等ハラスメント厳禁
- ③新小倉小や新任校長を支える
- ④研究団体として、研究を深める
- ⑤自然教室の新展開を注視する
- ⑥小学校教育研究会との連携
- ⑦新教育プランの動向を意識する
- ⑧次世代を育てる
- ⑨管理職の仕事がいいと思えるように

### ⑩教頭を支える

そんな今年度、中央教育審議会教育課程企画特別部会から論点整理が出され、次期学習指導要領に向けた基本的な考え方が示されました。その中には、「主体的・対話的で深い学びの実装」「多様性の包摂」「インターフェイス」「フィルターバブル」「エコーチェンバー」など、きちんと読みこなさないとわからない言葉で表現されているところもあり、今何が大切なのか考えながら読まないと流されてしまう印象を受けました。また、調整授業時数制度の創設など、新たな学校の姿も提案されています。

これらの考え方を一人一人がきちんと理解し、川崎市の教員が、教職にやりがいを感じられるような、そして、次世代が川崎市を選んで良かったと思ってもらえるような魅力に溢れた小学校教育を目指していきたいと考えます。そのために、まずは私たちがこれまで積み上げてきた成果を大切にし、そして抱えている課題にしっかりと向き合うことで足元を見つめ、将来の姿をみんなで語り合い、同じ方向を向いて歩いていくことが大切かと思えます。

これまでも一緒に歩んできた小学校教育研究会とさらに結束を固め、互いの特性を生かしながら、川崎の子どもたちのために質の高い教育活動を進め、更なる教育の充実発展に努めていきたいと考えています。

今年度教育長も代わり、来年度教育プランも一新されます。それに伴い、来年度の研究主題も一新する予定です。どんな時代が来ても、しっかりと足元と未来を見つめ、小学校 115 人の校長が心を 1 つにして、同じ方向を向いて進んでいきたい。今後も、川崎市立小学校長会が川崎の子どもたちのよりよい成長のために、協力して活動していけたらと思います。



## 『子供を主役にした学びの推進』

川崎市教育委員会 教育長 落合 隆

昨年、川崎市は市制 100 周年という歴史的な節目を迎えました。この記念すべき節目は川崎の歴史を振り返り、先人の努力や功績に深く感謝するとともに、川崎の発展の礎である、様々な人や文化を温かく受け入れ育んできた、多様性という価値を改めて感じる事ができ、次の 100 年へとつなげる素晴らしい機会となりました。

また、全国緑化かわさきフェアなどの多彩な事業が展開され、各学校では様々な記念事業に御協力いただき、子どもたちと喜びを分かち合うことができたことにも心から感謝申し上げます。

次の 100 年に向けて、子どもたちのより良い未来を育むために、引き続き校長先生方のお力添えをお願いいたします。

さて、現行の学習指導要領が小学校で全面実施されたのは令和 2 年度ですが、昨年、次期学習指導要領の策定に向け、「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」が、中教審に諮問されました。これまで通りの流れで行くと、令和 12 年には新しい学習指導要領が小学校で全面実施になる見込みです。現行の学習指導要領の理念や趣旨の浸透は道半ばとあるので、「主体的・対話的で深い学び」は、これからも継続されていくのではないかと思います。

現在、社会や経済の先行きに対する不確実性がこれまでになく高まるとともに、社会の在り方そのものが急激に変化する可能性があり、変化の先行きを見通すことが一層難しくなっています。

所信表明の中でも申しましたが、社会情勢が急速に変化し、学校や教員に求められることも変わってきていると感じますが、どのような時代が来ようと、予測困難な時代を生きる子どもたち、そして持続可能な社会の担い手となる子どもたちをしっかりと育てていくことが大切だと思っています。

近年、「指示されたことはできるが、自分で考えて仕事が進められない」、「自分の考えが持

てず、多数意見に流される」、「夢や希望が持てない」といった、若い人の課題を聞くことがあります。また、子どもたちを取り巻く環境も変化し、自分で課題を解決していく力が生まれにくい環境にもなっています。自己決定をせずに与えられることが当たり前になってしまえば、主体性は育ちません。さらに、子どもたちが教員に指示された活動をするだけでは、その主体性は育ちにくく、学校が楽しくなくなるのではないかと感じます。だからこそ、子どもたちが「学びの主役」として、自分たちで学校を創り上げていくことが大切であると考え、「わくわく・ドキドキ感」という言葉を所信表明で使いました。

私が考える「わくわく・ドキドキ感」を大切にした教育活動とは、子どもたちが夢中になり「どうしてだろう」、「不思議だな」という気持ちを高められる学習や、よく考え、他者との違いを尊重し合いながら、自分の思考を深めていく教育活動を指すものです。

例えば「こんな運動会にしたい」、「学校のルールを考えてみる」といった子どもたちの思いや「なぜ」、「どうして」という子どもたちの疑問から始まる教育活動を、各学校の創意工夫のもとで実践していくことが「わくわく・ドキドキ感」につながっていくものと考えています。

子どもたちの思いや声を形にした体験活動を行い、好きなこと、夢中になれることに粘り強く取り組む経験は、子どもたちの自信となり、自己肯定感を高めていくと思います。

学校が、子どもたちや子どもたちを見守る大人たちの「わくわく・ドキドキ感」を高める場となるとともに、子どもたちが主役となって学校を創り上げていくことを、これからも期待しております。

子どもたちが夢中になり、「どうして」、「不思議だな」という気持ちを高められる学習や、よく考え、考えを出し合い、他者との違いを感じ、互いを尊重し合いながら、自分の思考を深めていく教育活動を進めるべきです。